

三宅雪嶺集

杉浦非水裝幀

改
造
社
版

昭和六年一月七日印刷
昭和六年一月十日發行

現代日本文學全集 第五篇

著 者 三 宅 雪 嶺

發 行 者 山 本 美

東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印 刷 者 杉 山 愛 二

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二二



發 兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目四〇番地

改 造 社

振替東京八四〇
電話芝(43)
四三二一二番番番番番

「三宅雪嶺集」目次

卷頭寫眞(照影)

序 詞(筆蹟)

我觀小景……………三

宇宙……………四六

眞善美日本人……………二五

偽惡醜日本人……………二五

冒頓……………二五

西郷隆盛とガリバルヂー……………三〇

二元帥を中心に……………三七

東西英雄一夕話……………四九

東洋へ來れる歐米人……………四二

黑黃白人對等觀……………四七

明治年間に於ける思想……………四三

變遷の一斑……………四三

説と字と文……………四七

歳時

新年と舊年……………四七

老か壯か舊か新か……………四八

生命の長と幅と厚……………四八

勤勉と餘裕……………四九

寒月梅花を照す……………四九

如何に浩氣を養ふ……………五一

雪中松と白色綠色……………五一

大寒よりして立春……………五一

紀元節の意義を知れ……………五一

紀元節と梅の節句……………五一

梅……………五一

源は遠く水は清かれ……………五一

男兒祭女兒祭……………五一

春……………五一

是より花の季節……………五一

皇祖祭櫻花節……………五一

五月幟と五月柱……………四六四

兩節句……………四六四

花風去り葉風來……………四六五

正に六月の霖雨……………四六六

優等生よりも實力生……………四六六

七月の學生……………四六七

本月輩出の新人物……………四六七

卒業式か始業式か……………四六八

卒業に伴ふの悲哀……………四六九

何處へ旅行する……………四七〇

歸省する幾萬青年……………四七〇

休暇は情眼を強ひず……………四七〇

夏は天然娛樂多し……………四七二

避暑地域は廢物利用……………四七三

登山か水泳か其他か……………四七三

陽曆に於ける八朔……………四七四

冷靜熱動共に銷夏す……………四七四

銷夏法に就き……………四七五

游……………四七六

無休暇より良成績……………四七六

暑中何をか得る……………四七七

秋色を觀じて人事に及ぶ……………四八八

秋……………四八八

齊しく彼の月を賞す……………四八九

秋は高く露氣清し……………四九二

百鍊して秋水の光……………四九三

九月十三夜の賞月……………四九四

月星の光に親むも妙……………四九四

銃……………四九五

天長節の過去將來……………四九六

私の小春日本晴れ……………四九六

霜露降り木葉落つ……………四九七

日英兩國の黃葉季……………四九七

秋景漸く冬景に變ず……………四九八

冬に入りて何の感……………四九八

政治季節と火事季節……………四九九

雪……………五〇〇

年の終末……………五〇〇

老の到るに到らざる……………五〇〇

前……………五〇一

邊見十郎太……………五〇二

（附）山と水……………五〇三

省新明月種板正

懷素真止山木亭系題

清秘

門牆庭樹助幽和

新

建志必成地

凌憤忘還反不為

人年七十正友每

雄

我 觀 小 景

凡 例

一 昨年九月亞細亞第十一號に我觀の一欄を設け、哲學に關して陳述すること有らんと欲し、先づ其の緒言を作て曰く、

余は哲學に關して未だ一たびも私見を開陳せしことあらざるなり。名を哲學會の發起人に列するも、其の例會に演說せるは他に一回、亦固より簡疎にして道ふを須るず。會の雜誌を發刊するや、其の第一號に載するの說は、亦特に以て責を塞ぐに過ぎず。哲學館の講義を讀ぶも、時には則ち哲學史の梗概を説き、時には則ち先輩の論著を講述するのみ。嘗て哲學消滴といふ一小冊子を著すも、以て少しく諸家の意想を表明し、評隲せんとするに在りて、務めて私見を闊ふことを避けた。故に谷本富氏が哲學會雜誌に於て、高橋五郎氏が國民之友に於て、丁寧にかの著を評するを辱うせしも、曾

て一辭の以て答ふことあらざりき。蓋し哲學の道ひ難く、辯じ易からざるや、片々たる小疑問と雖も、坐談の頃、笑話の間、輕忽粗率の思考を以て之を遇し、之を解明せんとするは、甚だ其の事に不忠なるものにして、亦決して爲すを得べからざるなり。乃ち今自ら擲らず、敢て哲學全體に就て、縱に私見を加へ、諸君を大方に質さんとす、抑も以なくして爾せんや。

第一 志の之く所、己れが欲するがまゝに爲して其の能力を伸ばすは、人生愉快の事たり。呱呱たる孩兒、襁褓の中に在り、且ほ既に其の早蕨の如き手指を揮うて玩具を弄し、而して自ら娛むなり。人の尤も厭惡する所の者は何ぞ、曰く東洋、東といひ、縛といふ、其の手を枷し、其の足を鎖するの名、轉じて其の感情思想を抑制する所以を表するに至る。獄舍何物ぞ、礎して柱し、柱して

梁し、梁して葺す、亦好機運にあらずといはんや、乃ち地に畫して之を爲すも入るべからざるもの、我が自由を奪はるといはいざらんや。我に自由を與へよ、否らずば我に死を與へよ、生死も亦大なり、或は泰山よりも重しといふ、而して之を輕ずること鴻毛毫厘ならず、萬骨爲に枯れ、血を曠野に蹂み、以て自由を買ひし連、欺くべからざるなり。自由既に得たり、人間世界以て百年事なかるべきか。足ることを知らざるの已むなきや、久しいかな、馬を險坂に驅る、坂盡きて而して馬退むべからず、横溢せる能力は必ず其の至る所を窮めて止まんとし、劍筥底に鳴り、肉體裏に生じ、氾濫の勢、平地に波を起し、事を好み、禍を微ひ、大亂を醸成して以て快を一時に食るに至る、皆能力を伸ばすの愉快已むべからざるか。顧ふに欲する所泥りなし、有る所を盡して其の欲する所に徇へんとす、難い哉。位九五の尊を履み、八十載の餘威に籍て、二世豊富の蓄積を傾け、力を四夷に伸ばし、思を神仙に馳せ、豪奢驕侈、洵に人生の果報を享け

盡すも、秋風起て白雲飛ぶを見れば、漢武も亦悵として歡樂極て哀情多しと歌ふを免れず。豈我が行路を妨ぐるの亞爾伯山あらん、不能の二字は愚人の字書に於てのみ之を見ると、孤島の嶺、遽然として上國の天子たり、意氣跌宕ハ荒を併吞するも、區々たる歐土の霸略、其の智を彈し慮を竭して、且つまゝならぬ世事をかこしこと幾許ぞ、かくして拿破崙の生涯は煙雨、幽囚の裡に展轉反側して終れりき。風雲際會、志を上流に伸ぶる者の成就する所如何、況んや居り難きの下流、必らず居らざるを得ず、積威の人を約するに足るなき者が、非望を増長して、徒に手足をもがけばとて、易をか爲さんや、易をか成さんや。奈何せん、人の欲望の抑ふべからざるや、久安無事、毎に中より動くの能力、物々として禁ふべからざるに苦しむ、但だ力足らず、時會せず、鬱として不平なるや、則ち便ち慷慨し、悲憤し、居れば則ち忽々として張ふ所あるが如く、行て之く所を知らず、以て自ら傷り自ら損ず。渠は知らんや、人生愉

快事、獨り筋骨の能力を振うて、同輩の動物を制御するに止らず、別に天地の形骸に非ざるありて、自ら其の欲する所に徇ひ、其の能力を伸ばすに於て綽々として餘地あるべきを。顔淵喟然として歎ずらく、罷めんと欲するも能はず、既に吾才を竭す、立つ所ありて、卓爾たるが若し、之に従はんを欲すと雖も、由るなきのみと、由るなきの歎ありて、且つ罷めんと欲するも能はず、斯て簞食瓢飲、屢々空しうして其の樂を改めず、一の愉快にあらざらんや。炒豆を噉着して、千古萬古の英雄を嘲殺罵殺す、亦一の愉快なるか。桃花流水、悠然として間吟放浪、天地の心に通じ、鬼神の幽と語り、鏗爾として金石より出るが如く、恍惚として天上より来るが如し、亦一の愉快なるか。若し夫れ哲學が思想の運用に其の能力を繼にすることを得るや、至り極る所を知らざるのみ、言へば咎あり、議すれば刑あり、世間無數の惡態、盡く是れ抑制の現象なり。獨り哲理に至ては、其の思想を養するや、畜にかの動物の拘率を受くることなきのみ

ならず、無邊際を極め、無量劫を閲し、快乎たり、厭如たり、物の以て抑制すべきあらず、固より兎旒其の頭を束し、其の身を拘す、南面百城の以て樂を易ふべからざる所なり。余は乃ち愉快を這裏に取り來らん。

第二 我を認むる者、斯に各々獨立の心なきを得ず、而して斯に又獨立の作用なかるべからず。唯國家に觀るも亦復然り、此の國家や、以て彼の國家に別つ所あれば、此の國家の彼の國家に對する、亦獨立の作用あらざる可らざるなり。我が邦の以て森々羅敷せる海外列國の間に別はり、而して自ら立ち、而して自ら別つ所以、それ如何とかなる。兵力を言はんか、十萬の陸兵、四十隻の艦船は邊海の警に應ずるに覺束なし、財力を言はんか、八千萬の歲計、其の課求に苦んで、羈々として民力の休養を説く、何を以て歐土列邦の間に比數せんや。固より以て今日の貧弱に安じて止むべきにあらず、日月蹙迫、富強の實を擧げんこと、當務の急といふべからずばあらず、抑も是れ歲月の效、方に之を積日の後に

望むべく、且夕の能く辨ずべきにあらざり、而して國家が以て自ら地歩を占めて、獨立の作用を示すや、一日も緩うすべからざれば、力の以て伸ぶべきあらば、直ちに由りて國光を揚ぐるを勉む、固より其の所なり。今日に當りて、以て彼に頡頏して、速に效を奏すべき者を求む、それ唯學術に在るか。學術の進暢、亦資金に須つあるや、歐土文物の盛、特に其の學校の衆多、教授の道に於て整理せるを以てせず、而して博物の館、展覽の場、機巧、技藝の苑、彬々として完備せる者、以て之を致すといふ。蓋し學術の知識を一般國民に播布するの道に於ては、必らず爾らざるを得ざらん、夫の單に一國學術の品位を高うするが若きは、必ずしも斯の如く大げふに、斯の如く彬々たるを待たざるなり。物理學、化學、其の以て學理闡明の用に應すべきの機械材料は、之を備ふる必ずしも莫大の費を抛つを要せず。且つ百科の學術、定論の未だ立たざる者、指數に勝へず、苟くも思想を此に用ゐんと欲するあらば、處として思を潛むるに價せざるはなけん。

たとひ艱深の學理之を闡明するの難事たるを以て之を舍くことあらんも、東洋諸國、歐人の足跡到らざるの地決して少しとせず、蹶起して探檢の途に上らば、地質、生物、社會、生理等の學科に於て、新資料の莫然として吾が前に疊積し、吾が新知識を啓發するを待つが如きを見ん。現在種族の狀態を觀察して、之を古時の狀況に比照し、因りて世態に關する理論を發揮せしことの較著なるは、近時歐土學界世界の實情なり。矧や種族、開化、皆其の源流を異にし、交通阻絶、悠久に亙りて、曾て相知らず、而して別に居然たる一大國民を形成せる東洋の現象に於て親切に研究するあらば、其の學術の資料に於て獲る所無量にして、因りて學理の一新を致すことあらんは、殆んど疑ふべからず、是れ學士書生の須らく勉むべき所にあらずとせんや。然れども糧を裏んで萬里の征途に上る、猶ほ是れ多少の資金を備ふるなかるべからず、所謂學士、書生、毎々窮乏を免れざるは古今の常態、何を以て遽に幾千の資を辨せん。唯哲學が、以て擔石の

儲なくして、縱に思想の上に振ふを得べし。夫の哲學の變遷を繰ねて、其の史跡を研究するが若きは、亦往古來今、東西諸邦の陳籍を涉獵して、遍く其の旨を窮めざるべからず。但だ斯學の理論を攷察して、玄を鉤し陸を探るは、實に純手たる思想の運用に屬し、紛々たる靈殘紙片の力に藉ることなくして、元坐靜觀、形影相懸り、而して絶大の事、至妙の理、方寸の内に燃えて、施て顯幽の境界を照破するを得ん。茅茨破簷、月嘲り風笑ひ、偏仄として陋巷の中に在りと雖も、以て浩々の氣を抑塞すべからず、余が擇で取るべきの學術は蓋し此に在り。

第三 學理の闡明は、十二分の精密を要す。一生を學術に委せる者、古より多からずとせど、五十年の生涯、之を不窮の事業に獻じたる、消日其の道を得ずとすべからず。粗漏の觀察、忽略の研鑽、輕易に淺見を披露するは、學術を汚すの罪免るべからず、而して一適に由て自ら辱しむるに足る耳。但だ事實資料を蒐集して、其の據證を精確にするは、固より

歲月を積み、彙類の由りて精緻を致し、若くは機械の由りて完整に歸するの甚だ喫緊なるを見ん、其の純乎たる理論を考究するの事は、夙く中年以前に成熟するを以て常とするが若し。天文學者、物理學者の若きも、數理を應用して、理論の節々精緻、一絲違はざるを致すは、類然たる老境に至りて方に成就すれども、其の梗概は則ち早く壯時に定まる者、比々皆是れなり。ニュートンが其の理論の完備精細を極めしは、固より老年に在り、而も重力の法は既に少壯の時に發見されたり。哲學を攻むる者に在りては尤も然りとす、詩人が字句の烹鍊を極むるは其の老境に在れども、想像の豊富は寧ろ少時に若かずといふ、哲學の思想を驚せ、能力の運用を縱にするは、頗る詩に類することあるなり。從來哲學者、誰れか其の定見を立てざりし者ぞ、デカルト、二十四歳、ノイブルフに居りて、初めて其の意見を定めたり、其の議論の完備せしは遙か後年に在りしも、大段の此の時に立てる者、竟に大に變ぜざるなり。ヒュームが哲學の著作は二十六七の

交に在りて、爾後全く筆を哲學に絶てり、所謂ヒュームの懷疑哲學は實に此の少時の著書なりとす。ライブニッツが初めて哲學に關する一家言を著せし歸も、蓋し此と大差なし。カントが其の新哲學を以て一代を動かせしは六十歳の頃に在り、而も其の意見の端緒は三十前後の著作に於て頗る之を認むるを得べし。渠れ自ら其の諸子の著論に感ずる所あり、斯に其の新學說を啓發せられしを告白すと雖も、詳に其の立論の結構を案ずれば、其の少著に淵源するや、逕蹊の蔽ふべからざるあり。フキヒテが書を著してエナの教授に聘せられしは三十一歳の頃と覺ゆ。シェリングは其の少壯にして家言を發表せるを以て名ある者、實に三十歳にして、一家哲學の思想、傾注して遺す無く、更に壽を享くること五十年、一事の傳ふべきなかりき。シュッペンハウエルが大著は其の三十二の時に成り、ハルトマンの著作は二十二の頃より二十五歳の間に完結す、所謂不意識の哲學は即ち是なり。更に眼を放て諸々他の哲學者を觀るも、其の一家の定見を立

つるは概ね三十前後に於てせざるなし、哲學の識見が此の時期に定まるは、思ふに必然の故あるならん、かの四十五にして聞ゆるなきは、彼れそれ竟に成るなきを以て之を斷ずるも、誤れりとすべからざるなり。余や今大馬の齡、亦三十歳に滿てり、若し幸にして學ぶ所全く空しからず、聊か一家の見たる哲學の上に立つべからしめば、今や實に其の時なり。今にして以て立つべからずは、後の立つや竟に望むべからず、則ち哲學に關する意見を發表せんと欲するあらば、今を舍いて將何れの時を待たん。其の陋劣にして觀るべきなからしむるも、時は至れり、復進むべきの前途なきを奈何せんや。歲月の效を積るにあらず、涉獵の勞を取れるに非ず、便ち輕率にして其の見る所を述ぶ、陋劣の識は固より免れざるを知る、而も識を恐れて敢て述ぶる所なからしむるも、陋劣なる者世も亦假して高尚ならしむべきにあらず。陋劣は我在り、述ぶると、述べざるに在らずば、一念の述べんことを欲する、斯に斷然として之を述ぶるも亦可ならずとせ

んや。
 哲學の意見、述べべきや既に決す、抑も如何にして之を述べんとするか、是れも亦一問題なり。哲學の研究は、一國の私事にあらず、弘く列國の學者に示して、其の意見を叩くを當然とせば、之を述ぶるに尤も廣く行はるゝの國語を以てすべし、之を著すに一巻の書冊を以てすべし、然らずば之を載する、哲學會雜誌の更に適當なるありといふ。是れ皆非なり。外國語を以て之れを述べ、而して外國人をして普通に解得すべからしむるは、難きこと言語に絶せり、必ずや大に外國人の刪潤を経ざるべからず。斯の如くして假りに其の文字に遺憾なきに至るも、效果の以て勞を償ふに足るは、殆んど識るべからざるなり。獨語の英佛語と相距ること幾何ぞ、獨逸の哲學書の英佛人の眼に上る者、寥々として晨星の若きのみ。且つ獨逸は哲學の國なり、シロツペンハウエル絶妙の筆を以て超倫の理論を發揮す、而して其の國人の曾て其の書名をだも知らざること四十年、厭世の大家をして、絶望悲憤に其の世を卒

へ、徒らに地下に盛名を擔はしむ、國人大家に負かずと謂はんや。乃ち今絶海の東、日本國の一寒士が、呂律の合はぬ外國語を以て、聊か著作する所あればとて、何人か注意を此に傾くる者あらん。之を大家に贈れば、絶東の異邦人が著作を珍異として、御世辭に充されたる簡短なる返書を與へ、書架の飾りとして一隅に列陳せらるゝことは之あらん、書中の消息、仔細に咀嚼して、異邦人の腦力を檢せんことは、萬望むべからず。寧ろ若かんや、述ぶる者が述べ易く讀む者が讀み易きの邦語を以て之を記し、聊か邦人が其の思想を練磨するの資に供せんには、其れ或は思想深邃の人、踴躍風發、新説を發揮して全世界に表白するや、資て以て其の理論を啓發するの料に供せらるゝを得ば、是れ且暮に之に逢へるなり。之を著すに冊子を以てし、若くは之を哲學會雜誌に載するは、洵に其の識者の一部に同らんことを恐る。余は固より此を以て専ら哲學を攻むるの徒の評議に任せて足れりとせず、苟くも獨立の思想を發揮して、事功を創立せんとするの

人は、探て參攷に資するあらんことを欲して已まざるなり。且つ人の稱して哲學者とし、而して自らも亦哲學者たるを許す者時に或は哲理の思想に匱乏し、而して事理を剖析するの能に富む者、却て思ひもかけぬ種類中より出づることあり。余は寧ろ解心の異類人と語るも、白頭生面の哲學者と談ずるを願はず、是れ「亞細亞」を擇んで、特に之を掲ぐる所以、竊に以て載録甚だ其の處を得たりと爲す也。
 終りに臨みて且つ言ふ、余が意見の陋劣は言ふを待たず、而も今日に當りて以て力に之に向ふべきなし。昔千里の馬を求めて、其の骨を買ふ者あり、余は實に骨を售らんとする者、庶くは騏驎駉驪を按じて至り、勇を鼓して新説を發揮する者翕然として起らんか、余の至願なり。余は洵に郭隗なり。
 次いで其の第十二號に定義上と題して云く、
 哲學とは何ぞや、既に此の間を得。斯に必らず之が定義を與へざるを得ず。抑も定義それ輒く道ふべけんや。(一)夫れ

哲學なる名辭は、我より作れるに非ず、素朴語のフキロソフィーを譯せる所、其の語原は蓋し希臘のピタゴラスに發せりと云ふ。然れども其の語原こそピタゴラスに歸すべけれ、固より之が以前に在りて、哲學の源流は既に已に開けたり、爾來幾世代、此の名辭を用ゐて、各々其の家言を立てし者、指屈するに勝へず、而して立つる者が此の名辭に就て、各々一種の概念を有するは亦其の所也、夫の支那に在りて、性理といひ、致知といふも、太だ相類する者あり。それ既に斯の名辭あり、則ち斯に多少概念ありて形づくらの已むべからずとせんに、諸家其の宗を異にして、歸趣する所を知るべからざれば、一を取て他を捨て、而して妄斷して哲學の定義、全く此に止まれりといふを得ず。唯我が立つる所を擧げて、我が哲學は是れと謂うて足れり、即ち思想する所ある者が、自ら其の思想を反省するに、謂ゆる哲學なる者と相似たりといふに過ぎず、亦甚だ漠たらずや。

(二)且つ哲學なる名辭の下に包括せらるべき思想は、複雑多端なれりとす。今

之に定義を與へんといふ、是れ之が概念を語言に上すといふなり。夫れ概念の己れの心に銘識するや、太だ明瞭にして、自ら以て哲學と爲す所の義に於て、會て晦澁を患へずと雖も、之を語言に上するや、則ち最も簡なるの辭句を以て、かの複雑多端の義を表せんことを要す。既に複雑多端の義を表するに、最簡の辭句を以てすれば、其の用ゐる所辭々句々、皆一々に複雑多端の義を宿せざるを得ずして、既に辭々句々、皆複雑多端の義を宿すれば、其の辭々句々、亦一々に之に定義を下さざるを得ず、是の如くば易の窮極かあらん。要するに哲學の定義をして、極めて簡明に、而して極めて解し易からしめんとするは、至て難事にして、其の極を要せば、必らず其の議論の全體を通解するに非ざれば、定義の以て立つべからざるを見る也。

然れども先づ定義を與ふるは、我に在ては聊か其の概念を表出するを得、而して人に於ては、且つ以て標的を示すを得るの利あり。所謂哲學の定義に於て、其の正鵠を得んこと固より覺束なきも、哲學

の道ふ所、哲學に非ざる者の道ふ所と辨別あるは則ち或は之を得るに幾し。抑も形あるの物、感覺の以て知覺すべき者は、之に關する概念を表出するや、直ちに其の實物の具する所、形色聲臭を以てすれば、言ふ者既に言ひ易く、而して聽く者亦解し難きを患へずと雖も、かの特に思想に屬するの事に至ては、動もすれば漆桶掃帚、其の全體に關する概念を表出して、人をして輒く嘖嘖して遺憾なからしむるの極めて望み難きあり。當に説く者の以て明かに此の概念なかるべからざるのみにあらずして、聽く者も亦多少、聞いて而して解すべきの思想を有するなきを得ず。若し夫れ説く者の理義にして、嘗て通く世に行はるゝ所に非ず、而して一家獨造の見に係らしめば、其の思想を一括し、之が概念を作りて以て創めて聞くの人心に入らしめんとす、其の難きや益々甚し。然れども議論に入るの前に當て、其の綱領を擧げて概念を拈出し、以て標的を示すは、已むべからざるの順序たり、たとひ拈出せる概念にして難解難知の義たらしむるも、

かの標的の立たざる、其の論述する所の範圍、竟に何れに屬するかを知らざるに比するに、猶ほ愈るなり。

且く我が哲學の概念を拈出せんか。顧ふに所謂標的を立てて之を示すとせんも、其の在る所の何れの方なるを示さず、突如として標的を看よ、標的を看よと號ぶ、四顧倉皇として目眩せざらんや。人に教ふるに某の都邑を以てせんとす、先づ他の知る所の地を據とし、此を距る幾里程、何れの方角に位すと示し、然る後其の標山、帶河、形勢の詳細を説く、是に於て他の眼中、宛として其の都邑を睹る、是れ必由の序なり。我が所謂哲學の概念を説かせんと欲す、先づ一般普通に知らるゝ所、行はるゝ所を據として、觀察を下す、亦必由の序と謂はん。苟くも哲學といふ名辭を知る者、渠れ皆多少之が概念を有せざることを、其の概念や亦皆多少、所謂哲學に涉らざる者なければ、執へて以て據とし、對校して而して我が概念を發揮すべからざるなきが如し、而も若し其の普通に知らるゝ所、行はるゝ所を求めば、かの哲學會雜誌が常に

其の表紙裏に載する所より便なる有らざらん。是れ甚だ意を用ゐるの文字といふべからざれども、亦泰西哲學者の意見に於て頗る參酌し、幾くは大なる瑕疵なき者と謂ふを得んか。但だ哲學の義を釋するに於ては、其の曖昧にして錯誤すること、蓋し此より甚しきはあらじ。其の言に曰く、

哲學者。所以論究思想之原則事物之原理之學也。是故思想所及。事物所存。哲學莫不關焉。定心理之原則者。是爲心理哲學。定論理之原則者。是爲論理哲學。論政法之原則者。謂之政法哲學。論社會之原則者。謂之社會哲學。論道德之原則者。則倫理哲學也。論美術之原則者。則審美哲學也。論宗教之原則者。則宗教哲學也。其他文學史學教育學。與夫百科學。亦莫不各基于哲學之道理由于哲學之法則矣。故先輩稱哲學云論定諸學之原理原則之學。而又於哲學中。特有所論究原理之原理原則之原則之大宗宗。名之曰純正哲學也。何ぞ其の言の茫として捕捉すべからざるや。曰く哲學は思想の原則、事物の原理

を論究する所以の學なりと、是れ或は編者が以て哲學の定義と爲す所たるか。而して之に繼て則ち云ふ、是故に思想の及ぶ所、事物の存する所、哲學關らざるなし、某々の原則を定むるは、某々哲學とし、某々の原理を論ずるは某々哲學なりと、則ち謂ゆる哲學の義、之をかの謂ゆる科學といひ、理學といふ者に視るに、曾て分別するなきに似たり。凡そ學術と謂ふ所にして、其の語尾のロギーを以て終る者は、皆以て哲學と稱するを得べく、則ち哲學、義や、單に學といふに同じく、謂ふ所心理哲學は則ち心理學に同じく、論理哲學は則ち論理學と同じく、社會哲學は社會學、倫理哲學は倫理學と擇ぶなからん。然るに其の下に於て、先輩哲學を稱して諸學の原理原則を論定するの學と云ふと曰ふを見れば、亦疑なき能はず。謂ゆる先輩の稱する所は、蓋し主としてフキヒテの徒の言に取るあるか、コントの若き、スペンサルの若き、亦太だ相類する所ある者、而も此等先輩が謂ふ所の哲學は固より純然たる哲學にして、かの理學と分別するなきの學

にあらざるなり。其の下に於て又曰く、哲學中に於て、特に原理の原理、原則の原則を論究する所の大宗あり、之を名けて純正哲學と曰ふと、此の所謂純正哲學こそは、世人が之を理學に簡別して、特に哲學と謂ふ所なるか、即ち編者が單に哲學といふ所の者は、果して何を以て所謂科學といひ理學といふ者と簡べんや。然れども世人が理學に簡別して哲學といふ者は、則ち編者が以て純正哲學と爲す所なることは、纔かに明かなるを得たり、且つ所謂純正哲學の義とする所は何如。曰く原理の原理、原則の原則を論究するの學と、原理の原理、原則の原則、是れ果して何の義とする所ぞ。起手には則ち單に哲學として之が義を釋して云ふ、思想の原則、事物の原理を論究するの學と、斯れ亦足るに非ずや。何を苦しんで更に原理の原理、原則の原則といふが若き蛇足の釋義を下さざるべからざる。原理の原理、原則の原則を論究する者あらば、更に原理の原理の原理、原則の原則を論究する者あらざるを得ず、編者は則ち何くに標榜を建

てて、此より以て内を所謂純正哲學の論究すべき區域とせしか。編者は又原理、原則の二語を對用したり、所謂原理といふ語は、原則といふ語を以て差別する所あるか。思想には則ち原則といひ、事物には則ち原理といふ、心理と論理には則ち原則といひ、政法以下には則ち原理といふ者、亦か前の二者が思想に屬し、後の數者が事物に屬すといふを以てするに似れば、原則の思想に關し、原理の事物に關すと爲すは、蓋し編者の意ならん。夫れ單に原則といひ、原理といふ、均しく之れ究竟の道理に義を取るを常とす、今乃ち故らに對用して思想には原則といひ、事物には原理といふ、人をして疑を其の差別に生ぜしむるを致す、辭を設くること曖昧、人を誤るも亦已甚し。且つ既に原理を以て原則に對し、而して事物を以て思想に對すれば、則ち更に此に一の疑問を生ぜん、所謂原則の原則、原理の原理を論究すといふ者は、それ思想の原則の原則と事物の原理の原理とを併せて論究せざるべからずとするか、將單に思想の原則の原則を論究し、若くは單

に事物の原理の原理を論究す、斯に可なりとするか。ヘーゲルは全く思想を論究せる者なり、リュウキスの流は則ち事物の原理を究めたりと謂ふべし、是れ兩つながら之を純正哲學に屬すべきや否。且つ思想と事物と殊別に論究すとせば、其の兩者の關係は、何如に之を究明すべき、思想の原則を究明するや、勢必らず事物の原理を明らむべく、事物の原理を究明するや、勢必らず思想の原則を明らむべしといふ歟、時としては然ることあらん、而も是れ豈必ずしや。思想は則ち其の原則を究明し、事物は則ち其の原理を究明するも、かの兩者の關係に至ては、依然として知るべからざるあらば、竟に將に之を奈何せんとする。シエリングの若き、乃ち思想と事物との關係を保たんと欲し、斯に哲學を呼んで絶對の學といひしにあらざるや。今乃ち漫然として、思想の原則、事物の原理といひ、更に原理の原理、原則の原則といふ、帝に勉めて晦澁を増すのみならず、又濫りに假定を雜ふ、寧ろユーベルウエヒが哲學は原理の學なりと曰ふの

較晦澁を減じ、而して假定を濫用することなきに若かざるに似る也。哲學は原理の學なりといふ、其の義や亦甚だ漠然たるを免れざるも、原理を究明するの謂、即ち哲學たるを認知せば、聴く者以て微しく方向を知り、庶くは亡羊の數なきを得んか。但だ單に原理の學といふ、其の太だ漠然として、其の定義の或は循環の過に陷るなきかを疑ふ。且つ言へ、原理とは何ぞ、原理なる者の存立する、人の以て發見すべき所なるか、則ち原理なる者、必ずや一種の面貌を具するなきを得ず、而して原理以外、非原理なる者の以て原理に簡別すべきあるか。哲學は原理を究明すべき者ならば、其の非原理なる者は、抛棄して顧みず、斯に可なるか。若しかの非原理なる者、這裏皆實に原理の在るありとせんか、是れ竟に非原理なきなり、究竟するに原理を究明するといふも、竟に其の何の義を成すを見るなからん。人の善く言ふ所を聴く、曰く眞理を發見せんと、渠れ等は豈眞理なる者を以て、溪の底、岩の窪に潜在して、時有りてか人の眸子に入り來

ること、金といひ、銀といふ者の若く然りとなす乎、それをして顧みて一たび其の言ふ所の意味を思はしめば、茫然として自ら失せざらんや。嗚呼何をか哲學と謂ふ、哲學のそれ竟に定義を下すべからざる也耶。

篇を續て所志を果さんと欲せしも、偶と俄に南航の舉ありて、事中心にして絶えぬ。今年四月南土より歸り、宜しく再び前志を繼ぐべかりしも、多事匆卒、加ふるに別に考究する所あるより、今に至て未だ果に考す。因て思ふ、精思博辨、前日の所志を成して遺憾なからんは、自今而後、旬月の際に期す可くも思はれず、或は終生着手し難きやも測られず、而して全く所志を抛つて、前日の告白を空しうするも、亦至て負心の事と爲す、乃ち其の要を撮りて、梗概を簡説し了る、異日機あらば、更に博參旁照、以て前志を成すに及ばんか、而も是れ固より必期すべからざる也。

一 平日雜誌に新聞に時事を漫評し、間々學校に授業することあるも、概するに學術研究の事に於て、關係の極めて疎遠なるを免れず、又最も資力に乏しくして、書籍を

購求すること能はず、學理の討究事情皆適せざるなり。但だつれんの折り多少の攷思なきにあらずして、時に據べて以て篇を成すある已。かの常に大學に在て、専ら學術に従事し、其の書庫に據り、實驗室に入出して、博覽稽査の便ある者は、原より當に大に學術に奮ひ、其の所見を述ぶること縱横自在なるを得べし、亦其の職分なり。但だかの異日に大に奮はんといふに口を籍て、他人を冷笑し、一世を睥睨するは、甚だ取らざる所と爲す。云ふ、當に一生の力を竭して、千載必傳の言を立つべしと、然るも凡そ人の望む所、是より愚なるあるか、千載に傳ふる者、必ずしも超卓の言にあらず、道德經述ぶる所、決して秀絶と爲すべからざるも、而も老子は遂に道教の祖として、奉崇今に衰へず、アリストートルの教、中世に盛を極むるも、而も其の衆の爲に尊奉せられしは、方に其の淺薄の處にあり、夫の天文に關する言の如き、全く觀るに足らずして、而して久しく人の據る所と爲れり。偶々精確の言を立て、久しく埋没して、數百歳の後に顯はるありと雖も、是れ其の時や、人の知識適

此に類する説を認知する程度に迄到達せる者にして、特に其の人に待つあるに非ざれば、其の顯はるゝや、聊か先見若くは暗合の虚譽を博するに止まり、寸毫も世に裨益する所あるに非ず。凡そ一派の開祖として、永く後世に名ある者、必ずしも其の力あるを以てせず、僥倖に出づる者十に八九、而して眞に名を傳ふるとて亦何かせん、乃ち今自ら期して大に百世に傳はらんことを望む、俗物の慾のみ、孩兒の見のみ。今は當に其の爲さんと欲する所を爲すべし、笑ふべくして笑ひ、泣くべくして泣き、喜ぶべくして喜び、怒るべくして怒る、茲に足る、其の傳不傳を問ふは、鄙陋の至りなり、況んや異日に大に奮ふを名として、其の今の爲す無きを蔽はんとする者の若き、固に言ふに足らざる哉。

一、本書を讀む者、或は其の舉例の泛濫に過ぎて、論述の漫漶に失するを咎むるあらん。但だかの全體の立言、務めて簡潔を期し、究めて冗雜を避けたり。讀者の必らず二過讀了せんことを冀ふ、又既に短篇小冊、通讀に難からざれば、讀了に至らずして、妄りに疑念を挾まざらんことを冀ふ也。

一 本書は、之内藤虎次郎卿山芳三兩氏に口述して、記して文字を成せる所なり。後稍々點竄を加ふると雖も、文字の責は、素より二氏に在り。

序論

事先づ定義を要するか、其の定まれる義を求むといふか、時移れば則ち義も亦變じ、甚しきは今者の往者と全然相反する者あり、其れ焉くに往てか一定不易の義を求め得るとせんや。アルケミーありて斯に化學あり、アストロロジありて、斯に天文學あり、然るにアルケミーの化學と、已に其の義を異にし、アストロロジの天文學と、亦旨を等しうせず、今日盛に行はるゝ諸の學科、動もすれば原をアリストートルに歸せんとするも、而も其の言を立つるや、復決して二千年前の説と軌を同じうせざるなり。但だ名の存する所、實未だ全く變ぜざる者あり、其の變遷の跡を尋ね、其の脈絡の由を釋ねば、其の間亦多少の貫線を見ることがなれば、其の間の既に舊に仍らざる者

は之を索むるに由なきことありと雖も、近世盛行の學科にして其の前の代の創稱に係る者に至ては、たとひ説く所理論の日月に進遷變化する、復創起の當日に同じからざるも、其の名にして猶ほ存して改らざるや、其の義の一致も亦盡く壞られざるを看るなり。夫れ哲學なる者は、かの諸學科の中に在て、由來最も尙しき名辭の一なり、斯の學を爲す者、古今千百、各自ら定義を立て、其の甚だ衆くして互に異なるや、輒輒擲着、間々亦少からざるも、總て而して之を通觀するに、自ら一貫の義存するを見ずんばあらず。夫れ孔の老と、孟の揚墨と類なり、故に其の道とする所を爭ひて、正邪相距くを得、若し以て醫方、曆數の事を律せば、則ち端章甫を以て、越人に質するよりも甚し、類を同じうせざればなり。是故に新たに一科の學を起して、獨創殊異の言を立つる者、彼れ其の學の定義、少しも從來在る所と一致すべき者なければ、是れ并せて其の名を更むるの便とするに若かじ。苟くも既に存するの名を用ゐる者、其の立言の旨に於て、前人の言を非とし、一家の見を創むるも、其の講ずる所や、竟に前人と類を同じうせざるを得ず、類を同じうすれば、則ち其の間亦多少の一致を存すべきは、

争ふべからざるなり。今既に哲學といふ辭を用ゐる、其の立言の旨をして、世の哲學者と大に逕庭あらしむとも、其の講ずる所や、既に哲學の名に籍らざるを得ざらしむるときは、亦當時所謂哲學と其の類を同じうし、而して多少一致する所以の者なきを得ず、則ち今哲學の定義を立つるに於て、亦當時の哲學に關する觀念の傾向を察するなからざる也。意ふに今日所謂哲學の定義、區々にして定まらず、而も人之を哲學と謂ひ、我も亦之を哲學と謂ふ、固より相一致する所以の者なきを得ず。云く、哲學は知る所の全體を結合するの謂なりと。知る所の全體を結合することに限りて哲學と爲すべからずとするも、哲學としては己れの知る所の全體を結合し得ざるべからずとは、今日の一般に承認する所ならんか。以て爲らく百科學術の進達は、促して知識の闊博を致し、知る所の畛域益々廣し、乃ち剖して之を析し、全體の上より其の交互連絡の何如を観る、是れ結合の法なり、凡そ我れの知る所は、彼と此と常に多少連絡す、極めて下らしむとも、其の共に我の知る所たる一事、已に以て連絡の端を見るべし、是より以往、連絡を精にするの道、亦多方形なり、或は理想の能力に任じ、或は實驗の證

徴に籍り、而して統合既に完ければ、斯に髮髻として原理の現前を見と。顧ふに得る所の原理、其れ亦必らず確實不易なるを得るか、胡爲してか之を得たる、知る所の連絡を釋めるに由るといふのみ、而して所謂知るとは何ぞ、自ら以て知れりと爲し、而して此に満足するの謂か、唯自ら然りとして満足するのみにして、知れりと爲す所の果して眞を得て、復動かすべからざる者なるやは、必ずすべからざる也。認知の憑むに足らざりしや、昔は以て正確と爲し、而して今より之を見れば、全然誤謬たるを免れざる者、指し得るに遑あらんや。人智進むと一寸、乃ち昔者の誤を見ること一寸なり、日月に進むの知識あらば、是れ日月に見はるゝの誤ある也、而して此の全幅誤謬の知識を把り來りて、其の連絡を釋ね、以て確乎不動の原理を得べしといふ、難い夫。即ち其の個々の知識は誤あるも、其の連絡は終始變ぜずといふか、何を以て爾か言ひ得るか、徒らに強言帖過するに幾からずや。哲學ありしより數千歳、學者孰れか原理を發見すと言はざらん、而して未だ一人能く後人の非議を絶ちて、争ふべからざるの理教を發揮せる者あらず、是れ固より其の所、咎むべからざるのみ。己れの知れるだけの全體を統

合し、而して統合の際に順序を得たりと思惟する所、其の順序の何たるに拘らず、將他より看れば毫も順序を得ざるに拘らず、自らは是を稱して原理といふ、講學の道、此より過ぐること能はず、但だ宜しく全體を結合すべくして、乃ち反て一偏に僻し、強ひて偏見を立てて、以て衆理を禁遏せしめんとするが如く考へらるゝは、則ち太謬と稱せらるゝ耳、而も自ら謬なしとせば、復奈何とすべからざるなり。通常謂ふ、哲學は原理を考究するの學なりと、所謂原理は、亦實に其の知る所の統括し、貫通して、紊るゝなからしむることを得るといふなり、而も所謂原理、叢中の石を索むが如く、暗裏に逕を尋ねるが如く、必らず一定不動の箇の物ありて、之を發見すと謂ふを得んや。好し、之が發見を當れりとすも、其の原理の存在することを必するの理安くにか在る、原理といひ、原理の考究といひ、畢竟何の義ぞ、乃ち強ひて箇の物ありと想像して、此を據として一定の學理を建てんとするも、根柢既に定まらず、何を以て能く爲さん。或は以て究竟の原因結果を求むると爲す、而も所謂究竟の原因結果、果して之れ有りや否、人の知る所眞に涯り無きか、此を以て萬象の因果を逮了し、

而して誤りなしといふは僭に似る也。ロスキニは哲學を謂て究竟基址の學といふ、是れも亦知る所の基址を索むといふに在り、而も所謂究竟基址の存無、亦知るべからず、蓋し眇々たる一夫、纔に認知する所の事、左縦右縦、少しし連絡の見るべきあれば、則ち早計満足、以爲らく究竟原理此に在り、凡そ有る所萬象、盡く以て推言すべしと。而して其の知る所既に局し、見る所亦偏し、其の局知に自ら満ちて、其の偏見に自ら得たりとするは、滔々たる者概ね然りとす、是れ豈盡く據るべけんや。更に哲學を以て諸科學全關の理論と爲すあり、意ふに近代科學の進度、竟に萬象を包括して滲漏なき能はず、科學を統合するを以て、能事畢れりとせば、亦妙しく偏せるを見ざらんや。又更に此を以て完全に統合せる知識なりと爲すあり、而も所謂完全に統合せる者、亦眇々たる一夫、以て然りと爲すに過ぎずして、其の果して統合の完全といふことを得るや否は、固より必ずすべきに非ず。凡そ是等の假定、假定の小なる者、而して尙強ひて事を生じて、妄想の粉様を増し、偏偏を長ぜんとす、日新の理學を尊重する者にも、フキロソフアス、ストーンの語は免れざるにや。

知る所の全體を統合するは、特に哲學者などいふ一種の人物の從事する所に限るとせず、衆人或は之を爲して自ら覺えざることある也。知ることを欲して之を勉むるは、生と共に生ず、孩提の兒、亦暗を惡んで而して明を好む、蓋し人の明を好むは、光線の必らず愛樂すべしといふにあらざるなり、明處の以て物色を辨じ易く、自ら動くに便にして、危險の患少きを以てなり、此の習ひや生民と共に存し、積んで今日に至り、乃ち危險を慮るの念、轉じて暗處を恐るゝの情と爲り、孩提の兒も亦之を存するを致す。故に物の辨すべきあれば、暗處も亦厭ふ所にあらざる、盲者は暗夜を恐れず、マンモス洞の魚は全く目を失へり。但だ此等の光を要せざるは、實に殊例に屬す、光なきは固より光あるの知る所多きに若かざるなり、曙光燦として放てば、禽喜んで鳴き、獸欣んで奔る。光の必須は、人の自然に知る所、上帝といふ語の起原、大抵光に取る、舊約創世紀の開卷、上帝の先づ發するの言は、則ちそこに光あれと云ふなり、我が神代の史、亦大神天の窓戸を閉ぢて、六合暗黒、百妖盡く起り、其の開くるに及び、天地清明なりしを以て、史上の重大事と爲せり。光は即ち知ることに與りて

最も大なる者、以て知ることを重ずるの念、生民と共に自ら著しきを見るべし。知ることの重ぜらるゝこと斯の如きを以て、其の事の利害に關らずして、直接の必須なき者も、苟も疑はしきことあれば、必らず之を精究查明して、知られざる所ならしめんとするは、人情自ら至る所なり。昔は劍客の徒、技を學んで頗る熟するも、猶其の造詣の淺深を驗せんと欲し、則ち武者修業として六十六州を遍歴せり、是れ其の技の通國に雄たるを明かに認めんことを欲するに在り。山に行く者、溪谷の遠幽なるは何れの方、瀑布の練を懸くるは何れの方、徑路の羊腸たるは何くに通ずと知る、其の方斯に足り、而して其の樂亦満ちぬべし、而るを必らず荆榛を抜き、蒙茸を侵して、絶頂を踏まんとする者、固より登高の興、清勝の力を極むるに在らずんばあらざるも、又群巒萬壑連絡の形勢、一目の下に摺まるる更に大に樂しむべきものあればなり。蓋し頭を仰げば翠微鼻を壓して峻絶、亦興少しとせざるも、此の如きは群山疊沓、皆當面一峯の掩ふ所となり、其の勝概を悉すを得ず、然るを一旦最高峯頭に立ちて、嘔氣青天に通じ、眼を放て某山某水、皆其の來脈を指示す、快言ふべからざる者あ